

## <巻頭言>

# 技術用語雑感

日本大ダム会議専務理事 市 浦 繁

技術用語 (Technical Term) はなかなかやっかいなもので各専門学術部門に於て統一することが要諦であるがこれが意外と難かしい問題らしい。例えば同じ硬度 (Hardness) という言葉でも岩石の硬度と水の硬度では全く異なった内容を持っているわけで単に硬度という表現だけでは不十分であり誤解を招くことにもなる。我々が最も多く使っているダム (Dam) という言葉も国によって非常に意味が違って来る。これは英米語から来た言葉であるが、仏語の dam は我々の使うダムと言う意味ではなく domage (損害) という字の古語 (スタンダード仏和辞典) となっている。又、土木用語で突き固めという意味もある。ダム技術用語辞典に独語では dam という言葉はなく Dame (貴婦人, 英の lady), 言葉は全く英語および日本語のダムとは全く違ってイメージを持った言葉となってしまう。最近日本からの旅行者の多いオランダに行かれた人はすぐ気が付かれると思うがアムステルダムとかロッテルダムとかダムという言葉の付いた地名が盛んに出て来るが、これは日本語として使っているダムに近いものらしい。堤防といった意味らしい仏語のダムは Barrage で独語では Talsperre 又は Staumauer という。Damm という言葉もあるらしい (ダムに関する技術用語辞典 ICOLD オリジナル版1978)。

こんな例を挙げればきりが無いがダム (dam) の講釈はこの位にすることとする。

ご承知のように戦後間もなく (昭和29年頃) 文部省大学学術局長の指導により工学のみならず学術の各部門の学術用語集が制定された。土木工学編は昭和29年3月に制定され刊行されている。これを制定する為に設けられた審議会の会長は有光次郎氏 (国語審議会委員) で土木工学の専門家としては当時の東京大学工学部教授 (土木工学科) の福田武雄氏であった。このとき新たに制定された用語で注目すべき言葉が2つある。その1つは言うまでもなくダムであり、もう1つはトンネルである。ダムは戦前のご承知のように堰堤<sup>エンテイ</sup>という漢字が専ら使われており、かなり永く親しまれて来たが当時の当用漢字の中に堰の字が含まれておらず英語のダムが採用されたと聞いているが、これは大変な英断であり快挙であると思う。現在でも時々学術論文などで旧の堰堤という術語がえん堤という表現で散見されるがこれは是非改めて戴きたいと思う。トンネルも以前は実に難かしい<sup>ズイドウ</sup>隧道という言葉が使われていた。これも当用漢字の制限にひっかかりトンネルと改められた。ダムに劣らず大変な改善であると思う。隧道という舌を噛みそうな言葉と複雑な隧の字から来る印象は決して明るい感じを与えなかったが明解なトンネルという表現に変わって実に明るく快適な印象を与えるようになったと思う。爾来この学術用語の改正により公式の場では旧堰堤という語はすべてダムとなり技術用語辞典をはじめ土木学会のハンド・ブック (昭和49年発行) 土木用語辞典 (昭和46年発刊) などの技術書からは堰堤、隧道などの旧語は一切姿を消し、専ら新語のみが使われるようになった。ダム建設はその後益々盛んになり電力用のみならず、公

共事業費で建設される多目的ダムも増加してダム工事や完成したダムが一般国民の目に触れるようになった。一寸郊外をドライブすればすぐ1つや2つのダムを見掛けるようになった。こうなるとダム関連の交通事故も増えてくることになる。新聞記事などでバスがスリップしてダムの中に墜落し死者〇名負傷者〇名などという記事をよく見掛けるがこの表現は何時も気にかかっている。ダムの専門技術に携る者としては大変気になる表現である。問題の起こりはダムとその背後にある貯水池とを混同したのが混乱の基である。ダムの中に自動車や人が落ちることは考えられない。厳密に言えばダムの上の道路を見てもエレベーターホールやゲートなどの施設が全く無いわけではないのでその中に落ちる場合も皆無とはいえないかも知れないがこれは全く特別な場合で前掲の新聞記事の場合は明らかに貯水池へ車や人がスリップした場合のことを言っているのは明瞭である。従って問題はダムという言葉の中に貯水池が含まれるかどうかということになるが一般的には勿論ダムと貯水池は別である。アメリカではダム計画を表現する場合に普通 Dam and Reservoir Project といった名称を付してダム自身と貯水池をはっきり分けている。例えばアメリカの有名なフーパーダム（コロラド河）の場合はダムの名は Hoover でその背後にある貯水池は Lake Mead（ミード湖）と叫んでいる。日本でも東京都民の水道の水源となっている小河内ダムの背後にある人造湖は奥多摩湖という名称で呼ばれている。このような例は枚挙にいとまがない位である。ごく最近北海道広域利水調査会から贈呈を受けた『利水評論32号 Apr'86』に載っている浜田 正氏の「ふるさとのダム」という随筆の中に面白い記事があった。この中で浜田氏は私が今問題にしていると同じ問題について新聞社から問合わせを受けたのをきっかけとし「山越えの自動車ダムに転落」というタイトル中の「ダムに転落」という表現は正しいかという問合わせがある事に関連した実話らしい。大変興味をそそる内容であるがここに転載する余裕はないので興味のある方は是非一読をおすすめする次第です。この記事の結論は日本流定義（私が前述した解釈と同一）に従えば専門家の勝ち外国辞典によれば専門家の解釈はちと偏狭で新聞記者の勝ちと映るということになるがこの結論には承服できない。外国ではダムは狭義にはダム構造物だが広義にはダムで形成される貯水池を含む場合も稀にはあるらしいが既述の解釈が一般である。日本の法律では日本河川協会編の『解説—河川管理施設等構造令』という本にも第2章のダムの部 P.27～29 (8)の令および規則においてダムとはダムの堤体、基礎地盤、洪水吐き、副ダム、洪水吐き以外の部分のゲート等一体となってダムの目的に資する構造物の総称であると定義され、ダムの貯水池はダムという表現の中に含まれないと明瞭に区分されているので誤解のないようお願いしたい。私の個人的見解は日本流とか外国流とかに分けるのはおかしいのでダムの定義は唯1つ、構造令が明確に示している解釈に従うべきで新聞の表現は我々の目で見た場合は明に誤であると断ぜざるを得ない。

又よく使われている“フィルタイプダム”という表現は私が日本大ダム会議に関係する頃この表現は日本大ダム会議では使わないという申し合わせが出来ていると聞いていた。成程この表現は日本の論文などでは時々見かけるが海外の論文には先づ絶対と云っていい程見当たらない。コンクリートタイプダムとはいわずコンクリートダムという表現が普通である。フィルの場合もフィルタイプダムでなくフィルダムという表現の方がすっきりしており英語としても正しいのではないかと思われる。

以上ふだん感じている事を率直にありのまま述べた次第ですが、外国語の表現をそのまま借りてくる場合は十分な注意が必要で所謂 Japanese English にならぬよう留意が必要と思う次第です。